

IDEAジャパン ニュースレター

ハンセン病患者・快復者や、
すべての人々の尊厳の確立
を目指して

2010年 12月10日発行 9号

私の活動の原点

理事長 森元 美代治

新良田教室が残したもの

本年5月8、9の両日、第6回ハンセン病市民学会総会・交流集会 in 瀬戸内が岡山市、長島愛生園、邑久光明園、大島青松園を会場に開催され、全国から1300人が参加し、過去最大の盛会となりました。

2日目、長島愛生園で行なわれた分科会A、「新良田教室が残したもの」に私もパネリストとして参加させていただきました。「新良田教室」がはじめて公の場で論じられるとあって、市民学会教育部会の皆さんや多くの方々に関心が高く、90人のキャパシティである同教室の講堂に参加申し込みが殺到したため150人で締め切ったと、コーディネーターを務められた広島県福山市にある盈進中学高等学校の延和聰先生（ハンセン病市民学会運営委員、教育部会世話人、ハンセン病の差別・偏見をなくす市民ネットワーク HIROSHIMA 事務局）が驚いておられました。

パネリストは私（1期生）、藤崎陸安さん（5期生）、山口シメ子さん（5期生）、宮良正吉さん（7期生）、横田廣太郎先生（元数学教員）、三宅洋介先生（元美術教員）の6人で、それぞれ15分位ずつ新良田教室の思い出を語った後、延先生が設定されたパネラーとの会話形式、そして第三部として参加者との質疑応答が行なわれ、3時間にも及ぶ熱心な協議がなされました。

さて、新良田教室は1953年に日本政府の「らい予防法」制定に反対し、全患協（全国ハンセン病患者協議会＝現在の全療協）が一丸となって闘った熾烈な運動の成果として1955年に新設された入所者のための高等学校です。長島愛生園の新良田地区に建てられたことからその名が付けられました。生徒たちは皆、患者なので午前中1、2時間治療が必要なため、変則的な昼間の定時制普通課程として岡山県立邑久高等学校新良田教室は開校されまし

た。

当時 沖縄2園を除く11の国立療養所と3つの私立療養所には約600名の学齢児がいて、彼ら、彼女らにとって高校の新設は社会復帰への大きな足がかりとなる希望への光明となったのです。私にとって非常にラッキーだったことは、1952年、中学3年のときに発症し、国立奄美和光園に入所した翌年、奄美大島は日本に復帰しました。そのために私にも受験資格が与えられ、諦めていた高校進学への夢が膨らんだのです。一クラス30名に対し第一次応募は200名を超えていたため、高校入試にしては厳しい狭き門でした。負けず嫌いの私は真夜中の2時ごろまで問題集と時計との睨みっこで猛勉強に励んだ結果、第一期生として入学が許されたのです。星塚敬愛園（鹿児島県）の4名の合格者と合流し、岡山へと向かったのですが、われわれを待っていたのは鈍行の、夜しか走らない貨物列車〈後輩たちは皮肉って“お召し列車”と呼んでいる〉でした。貨車の入り口のドアには「伝染病患者移送中」と張り紙され、岡山駅に着くと、数名の愛生園職員が白衣にマスク姿というもののしい恰好で、われわれが歩いた跡を噴霧器で消毒しているのです。旅の途中から希望が失望に変わっていくのをどうすることもできませんでした。

小川正子女医の『小島の春』の舞台となった回春病棟に1週間隔離され、DDTで真っ白になったお風呂に入れられ、持ち物はすべて消毒、時計や万年筆がだめになる程でした。さらにわれわれを失望させたのは学校の教師たちでした。終生隔離撲滅政策の主唱者、光田健輔医師が現役の園長として君臨し、「隔離と消毒」を義務付ける「光田イズム」が徹底された愛生園のこと。近隣の町や村から定期船で通勤してくる10数名の高校教師たちは授業中も白衣と消毒が義務付けられ、年配のひどい教師などは嚴重に手袋をはめ、チョークや黒板消しさえ触ろうとせず、その都度、前方に座っている生徒に消させていました。われわれ生徒は教員室への出入りを禁じられ、ブザーの回数で教師を呼び出して用事をすませていました。夏休みや春休みには、実家から偽りの危篤電

報を打ってもらって帰郷しました。分館の担当職員に「高校生は休みになると電報が多いね」とからかわれたのを昨日のこのように覚えています。

もっとも惨めだったことは、4年生になって修学旅行をお願いしたところ断られ、その代わりにと兵庫県相生市の石川島播磨造船所に愛生園の船でつれて行かれました。小一時間はかかったでしょうか。船の上から進水式などを見ただけで、上陸は一步も認められず、そのまま愛生園に帰ってきたのです。「これが修学旅行かよ。行くんじゃなかった。」と皆、怒り心頭でした。われわれ一、二期生は建学の精神に燃え、良き伝統を築かんと、あの手この手を尽くして学校側や施設当局、入園者自治会に要望していましたが、何一つ実現することはできませんでした。

高校時代からプロレタリア文学をめざし、作家になった故冬敏之氏は卒業文集に寄せた「新良田教室論」の中で次のように書いています。「我々は生徒である前に、H氏病患者であるという意識を植えつけられている。それは、若い魂の余りにも重い負担である。しかも、我々は教師に対する時、先生と生徒という以前に、健康者と患者ということ深く意識する。〈中略〉、先生の情熱を阻む何かが、この島の中にも、生徒自身の中にも存在する。生徒にとって異邦人である先生たち一。白ずくめの予防着、予防ズボン、予防帽。そこには厚い白衣の壁が厳然と存在する。行き帰りに校門で逢う背広姿の先生たちに、我々は自分の知らない、どこか遠い処の人間を考える。そして、白衣の先生たちに、我々は始めて近付くことができる。が、その距離は限られている」と。

冬氏もハンセン病国賠訴訟の原告の一人とし尽力され、2002年、プロレタリア文学の最高賞といわれる「多喜二・百合子賞」を授賞して間もなく他界されたのが残念でなりません。

1987年に閉校されるまでの32年間に、新良田教室で学んだ若者は397名。内、卒業生は307名。大学進学者24名、専門学校等進学者49名、社会復帰者225名。中には有名国立大学医学部を出てハンセン病の専門医になった者や、レントゲン技師6名、看護師8名、他に教師、検事、デザイナー、電気技師、造船業等、社会のあらゆる分野の第一線で活躍しています。そして、ハンセン病国賠訴訟でも、多くの同窓生がリーダーシップを発揮し、結束して闘ったことはいうまでもありません。

閉校になる時、たまたま同窓会の会長だった私は卒業生に寄付をつのり、閉校記念誌『新良田』の発行と記念碑「希望」を建立することができました。碑文は私の拙文ですが、その中に「新良田 それはここに学んだわれわれの青春と栄光のシンボルである」と記されています。しかし、私のように順調に進学できた者はいいとして、一度二度、入学試験に失敗した者は悔しかっただろうし、思い出したくもないことかも知れません。WHO(国際保健機関)によるハンセン病の世界的潮流は開放医療でしたから、当時、絶対隔離政策の下に療養所内に高等学校をつくるということは、世界の“常識”からすれば言語道断だったのです。一般社会の受験生は、この学校がダメなら別の学校と選択肢も与えられていましたが、療養所の子供たちにとっては新良田教室一つしかなく、憲法で保障する「教育を受ける機会均等の権利」も奪われていたのです。新良田教室は日本政府が犯したハンセン病政策の負の遺産の一つであると言わなければなりません。

母校の子供たちに励まされて

最近、「無縁社会」ということばが流行語のように使われていますが、ハンセン病療養所は100年前からその無縁社会を生きてきました。発病するや家郷を追われ、自殺するか、秘かに園内に身を隠し、死んだら所内の納骨堂に園内名(偽名)のまま無縁仏として葬られる宿命を負わされていました。

実は、昨年6月15日発行の本紙第7号に私は次のような文章を書いています。「そういう“私”ですら、『森元家』の墓だけには入れてもらえません。私の名前が墓石に刻まれば、甥、姪、孫、さらにその子どもたちの結婚に差し障りが出てくるからというのです。私も無理して入ろうとも思いませんが、いずれ多磨全生園の納骨堂で無縁仏として眠るしかないと思っています」

母校の喜界町立第二中学校の先生たちがIDEAジャパンの会員になってくれていて、このニュースレターを送っていますが、佐藤貴紀先生が第7号を3年生14名全員に見せたところ、純朴な生徒たちの琴線に触れたのでしょうか。全員から思いあふれる激励の手紙をいただきました。

「ハンセン病問題の啓発活動に先頭に立って精進されている森元先輩が『全生園の納骨堂に無縁仏とし

て眠るしかない』などと先輩らしくもない、うしろ向きな考え方は理解できません。自分たちもいっしょけんめい応援するから、喜界島の森元家のお墓に入れてもらえるようにがんばってください」と。

幸い、私は昨年8月、奄美大島で行なわれた鹿児島地方法務局主催の人権フォーラムに招聘されていたので、その足で喜界島に行きました。丁度、夏休みで旅行中の一人の生徒を除いて13名の子供たちが私の来訪を待っていてくれて、教職員のみなさんを交えて、熱のこもった懇親会をもつことができました。

その時、私の大切な後輩であり、学校挙げてハンセン病問題に取り組んでいるこの子供たちの純粋な気持ちを傷つけてはならないと決心し、森元家の跡取りである甥の長男に話してみました。すると、若い彼は意外にもキョトンとした面持ちで、「おじさんが希望するように分骨して、半分は全生園に、半分は森元家の墓に入れてあげますよ」と約束してくれたのです。不可解な人生に予期せぬ出来事は付きものですが、何をか言わん、今回の後輩たちの心強い後押しが天に通じたことを素直によろこびたいと思いました。



記念写真／2010年11月3日

「隣人愛」を求めて

～10年目の多磨全生園訪問～

同志社女子中高 聖書科教員 平松讓二

きっかけは、らい予防法廃止の翌年の1997年に、多磨全生園ではじめて出会った講演会の講師、森元美代治先生の些細な一言から始まりました。「元ハンセン病患者の皆さんと交流させていただいたり、支援させていただいたり、私たちに何かできることはありませんか？」と尋ねた初対面の私に、「どうぞ気軽に、私たちの生活の場を見に来てください。生徒さんたち

を連れてきてください。それだけで結構です。」という返事が返ってきたのです。この一言がきっかけとなり、2001年から毎年、11月3日(祝)の全生園祭りで、IDEAジャパンのバザーをお手伝いさせていただいてきました。早くも今年で10年目を迎え、森元ご夫妻をはじめ、IDEAジャパンのみなさまにお世話になったことに感謝いたします。

京都の同志社女子中高という学校は、ハンセン病と誤診されたにもかかわらず、その生涯を看護師として患者の方々のために尽くした井深八重さんの母校です。生徒たちは中学1年生で本校に入学するとすぐに、先輩の井深八重さんの人生について詳しく学ぶ機会があります。また、毎朝行われる礼拝でもハンセン病に関するお話を聞く機会が多いということもあり、ハンセン病の問題は多くの生徒たちにとってごく身近な存在なのです。また、私が担当する高校3年生の「聖書」という授業では、1学期間かけて日本のハンセン病問題の歴史や課題を共に学んでいます。そして、この授業を通して、「元ハンセン病患者の皆さんと出会いたい!」「多磨全生園に行ってみよう!」と思ってくれる生徒たち20～30人の有志と教員3名が、毎年多磨全生園を訪問させていただいています。

聖書には「善いサマリア人のたとえ」という、生まれながらに差別を受けてきたサマリア人が、追いはぎに襲われた人を助ける物語があります。追いはぎに襲われて傷ついた人は、ユダヤ社会のエリートといわれる祭司や律法学者からは見て見ぬふりをされるのですが、サマリア人はその人を助けて介抱するのです。それは、いつも差別されて心が傷ついているサマリア人だからこそ、その人の痛みを自分の痛みとして感じる事ができたからだ、イエス・キリストは語っています。そして、サマリア人のような「隣人愛」を持つことこそ大切なことだと教えています。また、イエスはそのたとえ話の最後に、「あなたも行って(サマリア人と)同じようにしなさい。」と語っています。

同志社女子中高で学ぶ高校生として、元患者さんたちに対して「何かをする」ということには時間的にも能力的にも限界もあります。しかし、出会う人々の「痛み」をほんの少しでも感じ、たとえ僅かでもバザーを通してIDEAジャパンの皆さんの活動にお役に立てたら嬉しく思います。そして、この隣人愛の輪がどんどんと広がっていき、お互いに共生できる社会になってほしいと願っています。初めての療養所訪問で最初は緊張していた彼女たちでしたが、「普通のところやった!」と、今年もみんな笑顔で帰ってきました。

ブックレット

『絆～ハンセン病家族の国際連帯』ができるまで

事務局長 村上 絢子

2009年5月、鹿児島県鹿屋市で開催されたハンセン病市民学会の家族分科会では、「ハンセン病家族の国際連帯」をテーマに、韓国、台湾、ハワイ、日本の家族が集まって、家族が抱える問題について報告し合い、将来への問題解決に向けて、参加者とともに話し合いました。社会で孤立し、自ら被害を語る事の無い家族が一步踏み出し、市民学会という公の場で発言したのは意義深いことでした。

韓国からの参加者は、定着村に住む二人の若い女性でした。村の中で家族一緒に暮らせる反面、村全体が世間の偏見・差別にさらされ、屈辱的な仕打ちに耐えてきたと、涙をこらえながら話してくれました。けれど“万が一”世間に知られ、新たな差別を受けることを恐れて、名前と顔は公表したくないということでした。

台湾からは、楽生院の入所者母娘です。院内での出産と育児が禁止されていたにもかかわらず、楽生院で生まれ、隠れて育てられたという娘さんの報告には驚かされました。現在、入所者の減少に伴って施設が取り壊され、新病棟への移転を余儀なくされていますが、移転に反対する入所者は「楽生院は我が故郷だ」と保存を訴えています。楽生院の現在は、数年先の日本の療養所とダブって見えました。

IDEA ジャパンは、ハワイのオハナの会（カラウパパ療養所入所者とその家族会）から二人の女性を招待しました。一人は、カラウパパ入所者だった母親との確執を乗り越えて、“普通の親娘”になれた体験談を、もう一人はジャーナリストとして、また支援者としてどのように関わり、カラウパパで誇りをもって生きた人びとの人生を、どのように次代に伝えるかについての活動報告をされました。

日本からは、れんげ草の会（遺族・家族の会）会長の赤塚興一さんが、親をハンセン病隔離政策によって奪われた家族の苦悩と心の傷について発言しました。「小学校時代には、父親が患者であったためにいじめられた。成人してからも父に対する嫌悪感を拭き切れなかった。国賠裁判を通してそういう自らを恥じ、父を語ることで父の無念さを明らかにしたい。家族は未だに癒えない傷を抱えていることを理解して欲しい」

と、押さえた口調で話されたので、家族の心情が会場に染み通って行くようでした。

このシンポジウムを通して、家族が受けた被害が4カ国に共通していると同時に、歴史、文化、国柄による違いも浮き彫りにされました。「偏見・差別を解消するために私たちがへこたれず、未来に向かって進むことが大事であると確信できるシンポジウムになった」と、国宗直子弁護士（コーディネーター・司会）が締めくくりました。

このシンポジウムが終わってすぐ、私はこの記録を4カ国語別（日本語、韓国語、中国語、英語）のブックレットとして出版し、世界中の人びとに読んでほしいと考え、家族部会に提案しました。その理由の第一は、日本のハンセン病の歴史の中で、4カ国の家族と一緒にこの問題について話し合ったことがなかったこと、第二は、IDEAの国際集會に行くたびに「日本の出版物はたくさんあるけれど、日本語では読めない。ぜひ英訳して欲しい」と言われ続けていたからです。けれど家族部会としては、出版費用も翻訳費用も全くありません。まず資金不足の壁にぶち当たりました。費用のメドがついてから作業を始めようとしたら、出版は不可能でしょう。そこでまず、これまでに培った人脈を頼りに、翻訳してくれる人を探し始めました。厚かましいことは承知のうえで、「出版費用がないので、翻訳料を払えない場合もあり得ます」という前提条件でお願いしてみました。

すると、「無償でもOK」と、グレゴリー・ヴァンダービルトさん（カリフォルニア大学、社会思想研究者）が英訳を、倪加恩さん（通訳・翻訳家）と岳光さんが中国語訳を、西村麻里さんと韓基南さんご夫妻（通訳・翻訳家）が韓国語訳を引き受けてくださったのです。グレゴリーさんは、インドのハイデラバードでのIDEA国際集會（2008年）で、宇佐美治さん（長島愛生園）の通訳をしていました。倪さんとは、日本語修習生として来日した約20年前に知り合って以来のお付き合いです。西村さん・韓さんご夫妻は子育て真っ最中の若いご夫婦で、韓国の回復者と関係の深い柳川義雄さん（FIWCのOB）の紹介です。

まず基本になる日本語の原稿をメールで送って、3カ国語に翻訳する作業が始まりました。皆さん、誠実に丁寧に翻訳をしてくれていることが伝わってきて、心から感謝しながら、メールのやり取りが続きました。

続いて第三の壁は、シンポジウムでも顔と名前を隠していた韓国の参加者が、果たしてブックレット出版を了承してくれるかどうかでした。もし拒絶されたら、このブックレットはシンポジウムの記録として成り立たなくなります。IDEA 韓国と韓国弁護団を通してメールを交換した結果、名前と顔を出さない、定着村の場所を明かさないと条件で了承してくれました。息を詰めるようにして返事を待っていたので、OK と知ったとき、肩の力がスーッと抜けていくようでした。

いよいよ出版社に原稿を渡すという段階で、在日韓国人の実業家がつくった韓哲文化財団が、芸術、スポーツ、音楽、文化交流等々の分野で地道に活動している団体に助成金を授与しているという情報が耳に入ったのです。早速申請したところ、120 ほどの申請団体の中から、幸運にも「4カ国語でのハンセン病家族のブックレット」出版の企画を提出した IDEA ジャパンが授賞団体の一つに選ばれ、出版費用を全額支給するとの連絡が届きました。「“地獄(?)に仏”“天にも上る”というのは、このことだ!」と実感した瞬間でした。

その他に、ブックレット出版に協力したいという友人たちから過分の寄付をいただきました。お陰さまで、翻訳者の皆さんには、ボランティア料金でしたが翻訳料を支払うことができ、ご尽力に多少は報いることができた、内心ホッとしました。

今年5月、出来たてのブックレット『絆～ハンセン病家族の国際連帯』を持って、岡山・香川の両県で開催されたハンセン病市民学会に参加しました。大好評で、持参した部数はほぼ完売でした。また韓国、台湾、ハワイ、アメリカ、フィリピン、インド、ネパール、中国、ガーナ、マレーシア、グアム、ノルウェイなどの IDEA 会員に送付し、有効に使っていただいています。さらに海外での国際会議や集会でもブックレットを紹介して、活用していただくなど、4カ国語でブックレットをつくった甲斐があったとしみじみ感じています。

以上が、ブックレット出版についての経過報告です。

IDEA ジャパン会員の皆様も、ぜひ読んで、ハンセン病家族の問題をご理解くださいますようお願いいたします。

『絆～ハンセン病家族の国際連帯』

企画・編集 ハンセン病市民学会家族部会
発行 IDEA ジャパン

会員特別割引価格 800 円(税+送料込み)

(日本語、韓国語、中国語、英語 どれも同じ価格)
中国語は残部がごくわずかなので、ご注文は早めに。

**ご注文は、同封した振込取扱票をお願いします。
会計処理上、振込先を「ブックレット絆の会」に
しています。**

服部昭君の死を悼む

設立当初から IDEA ジャパンの主監事として尽力された服部昭君が、本年6月19日、67歳の若さで永眠されました。大切な人を失った悲しみは言葉になりません。

私は慶応大学法学部内池ゼミで故人と出会い、卒論を7名の共同研究でまとめ上げた友人の一人でした。ハンセン病問題にも関心が深く、2年前職場の同僚を集めて、私を講師に招いてくれました。豊富な経験を生かして IDEA ジャパンの会計の基礎を築いてくれました。ご冥福をお祈りしつつ。合掌。

森元美代治

事業の成果 (1) ハンセン病に対する差別・偏見除去のための啓発事業、(2) 国内外のハンセン病患者・快復者との交流及び支援事業、(3) ハンセン病関係の資料の収集・情報提供事業、の三事業を事業計画として掲げ、取り組んだ。

(1) の啓発事業については、①講演、②写真展の開催、③園内案内と国立ハンセン病資料館における説明、④その他の活動、の四つが主なものであった。

①講演については、森元美代治理事長が 44 回、行なった。②写真展については、八重樫信之理事が撮影した「絆—日本・韓国・台湾のハンセン病」の写真展を国内で 12 回開催した。③フィールドワーク(全生園と国立ハンセン病資料館案内)は、IDEA ジャパンに説明依頼があった団体に対して、森元美代治理事長が 30 回案内し、説明した。④その他の活動としては、09 年 5 月に鹿児島県鹿屋市で開催された第 5 回ハンセン病市民学会家族分科会のシンポジウム「ハンセン病家族の国際連帯」の記録を日本語、英語、韓国語、中国語に翻訳して『絆—ハンセン病家族の国際連帯』として出版した。

(2) 国内外のハンセン病患者・快復者との交流及び支援事業については、①生活改善のための支援(交流及び支援)、②奨学金支給、の二つが主なものであった。①IDEA 中国、IDEA インド、IDEA フィリピン(クリオン島)へ生活改善資金を提供した。また 09 年 5 月に鹿児島県鹿屋市で開催された第 5 回ハンセン病市民学会に理事長、理事、会員多数が企画段階から参加した。鹿屋集会の分科会 C「ハンセン病家族の国際連帯」というシンポジウムに、ハワイの家族会(オハナの会/カラウパパ療養所入所者と家族の会)から 2 名を招請し、ハワイの家族問題解決のための活動について報告し、韓国、中国、日本の家族と意見交換し、交流した。

② IDEA 中国、IDEA インド、IDEA フィリピン(クリオン島)、IDEA ネパールの学生に奨学金を支給した。

(3) ハンセン病関係の資料の収集・情報提供事業については、①IDEA ジャパンのニュースレター(ハンセン病市民学会特別号、7 号、8 号)の発行、ホームページによる情報発信 ②資料提供がある。

① ニュースレターの「ハンセン病市民学会特別号」では、鹿児島県鹿屋市でのハンセン病市民学会に招請したハワイのオハナの会の概要、カラウパパ療養所の歴史、オハナの会のポーリーン・ヘスさんとヴァレリー・モンソンさんのプレゼンテーションを紹介した。

7 号では、家族部会での国際交流、シンポジウムに参加したポーリーンさんとヴァレリーさんの報告を掲載した。また WAVOC(早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターからの『感謝の盾』)を授与された記事を掲載した。

8 号では、森元美代治理事長が中国でボランティア活動を続けている学生のグループ JIA(家)と QIAO(橋)について紹介した。森元理事長夫妻が訪問した IDEA ネパールとの交流と、奨学生のバサンタさんの近況について報告した。奨学金と生活支援金を提供しているクリオン島(フィリピン)から、IDEA ジャパンからの支援金の使い道について、写真とコメントが届いたので掲載した。

10 月に八重樫信之理事と村上絢子理事が訪問した台湾楽生院の実情について写真のレポートと、金城幸子会員の亡き母の法要についての記事を掲載した。平成 20 年度の事業報告と会計報告も掲載した。トピックスとしては、IDEA ジャパン、笹川記念保健協力財団、早稲田大学・平山郁夫記念ボランティアセンター共催のシンポジウム「ハンセン病はアジアをつなぐか」を簡単に紹介した。

ホームページについては、ボランティアの Y・T さんの尽力で、適宜更新するとともに、自動翻訳機によって英語でも読めるようになったので、各国の IDEA メンバーにも情報を発信できるようになった。

② 資料提供では、09 年 10 月に八重樫信之理事と村上絢子理事が台湾楽生院を訪問した際に取材した楽生院の現状を『DAYS JAPAN』2010 年 2 月号に掲載した。その号を理事や関係者に送付した。

平成 21 年度 特定非営利活動にかかる事業 会計収支報告書

平成 21 年 4 月 1 日から平成 22 年 3 月 31 日まで

特定非営利活動法人 IDEA ジャパン

(単位：円)

I 収入の部

1 会費入会金収入		
入会金収入	11,000	
会費収入	274,000	
2 事業収入	0	
3 補助金等収入		
地方公共団体補助金収入	0	
民間助成金収入	0	
4 寄付金収入		
寄付金収入	3,520,345	
5 その他収入		
基本金金利収入	196	
その他	11,085	
当期収入合計 (A)		3,816,626

II 支出の部

1 事業費		
(1) 国内のハンセン病に対する差別・偏見除去のための啓発事業	735,085	
(2) 国内外のハンセン病患者・快復者との交流及び支援事業	1,088,722	
(3) ハンセン病関係の資料の収集・情報提供事業	123,778	
事業費支出合計		1,947,585
2 管理費		
役員報酬	0	
給料手当	180,000	
什器備品費	0	
光熱費	0	
消耗品費	17,114	
会議費	47,241	
通信運搬費	97,201	
印刷製本費	65,641	
租税公費	0	
雑費	7,245	
管理費支出合計		414,442
当期支出合計 (B)		2,366,207
当期収支差額 (A) - (B)		1,454,599
前期繰越収支差額 (C)		1,750,562
次期繰越収支差額 (A) - (B) + (C)		3,205,161



ソウルで開催された「2010 世界ハンセン病フォーラム in ソウル」に IDEA ジャパンから森元美代治理事長、森元美恵子理事、八重樫信之理事、村上絢子事務局長、蘭由岐子会員、九重能利子会員が参加。森元理事長と蘭会員は「尊厳の確立」、八重樫理事と村上事務局長は「マスメディアの役割」という分科会でパネリストを務めました。詳細は次号のニュースレターをお楽しみに。写真は 12 カ国からの参加者

* トピックス *

5月21日／IDEA インターナショナル代表の Dr. ゴパールさんが夫人とお孫さんを連れて多磨全生園を訪問しました。その際、お孫さんが見事なインド舞踊を披露。回復者の皆さんと楽しいひとときを過ごしました。

11月3日／全生園を見学・研修に訪れた同志社女子高校の生徒さんたちと早稲田大学ボランティアグループのチャオが、全生園祭の IDEA ジャパンのバザーで、売り子さんをやってくれました。若い皆さんの協力により、52,445 円の売上がありました。

11月7日／早稲田祭でチャオが主催したパネルディスカッションに、IDEA ジャパンから森元美代治理事長と村上絢子理事がパネリストとして参加しました。

11月10日／WHO 薬剤耐性研究会への参加者の歓迎会を並里まさ子先生（おうえんポリクリニック院長・IDEA ジャパン会員）ご夫妻が主催。IDEA ジャパン、あおばの会（東日本退所者の会）、ハート相談センターがアイデアを出し合って、手づくりの歓迎会ができました。会員の酒井義一さんが毛筆で書いた横断幕は大好評でした。ASEAN の直前で超多忙なスケジュールを調整して、江田五月前参議院議長、菅伸子首相夫人（IDEA ジャパン会員）が、駆けつけてくださいました。衆議院議員の加藤公一さん（IDEA ジャパン会員）からも、メッセージをいただきました。

発行責任者：森元 美代治
特定非営利活動法人 IDEA ジャパン

<http://www.idea-jp.org/>

事務局：

〒204-0012 東京都清瀬市中清戸 4-847

中清戸 4 丁目アパート 7-605

Tel&Fax 0424-93-6105

編集後記：村上絢子

ソウルへ出発の前日、北朝鮮が韓国を爆撃したというニュースが飛び込んできました。何事もなかったように静かなソウルのなかで、フォーラムの会場は定着村からの参加者が多く熱気に包まれていました。経済的にも身体的にもハンデを負った各国の IDEA 会員の真摯な態度から学ぶことは多いです。チーム・IDEA ジャパンのプレゼンは好評でした。

E-mail info@idea-jp.org

FAX 04-2925-8165